

水辺エコトーンにおける生物多様性と生業活動・コモンスの変容に関する研究

1. プロジェクトメンバー

佐野静代	環境総合研究センター助教授(研究代表者)
山崎古都子	教育学部教授・環境総合研究センター長
中村正久	環境総合研究センター教授
梅澤直樹	経済学部教授
堀越昌子	教育学部教授
松田隆典	教育学部教授
服部昭尚	教育学部助教授
藤栄 剛	環境総合研究センター助教授
牧野厚史	県立琵琶湖博物館主任学芸員
宮本真二	県立琵琶湖博物館学芸員
赤石直美	日本学術振興会特別研究員

2. 研究の目的と計画

本研究の目的は、琵琶湖岸の水辺エコトーンにおける生物資源の利用と、そこにみられた伝統的な資源管理システムについて検証し、今後の水辺の「賢明な利用と保全」の方途を見出すことである。

内湖やヨシ帯などの水辺エコトーンでは豊かな生物資源を利用した多様な民俗文化が展開されてきたが、これら地域ごとに形成されてきた持続可能な資源管理システムは、今日では十分に検証されることのないままに失われようとしている。そこで本プロジェクトでは、自然科学と人文・社会科学両分野の協業により、ヨシ・魚類・水鳥など水辺の生物相と、それを資源として利用する人間の双方を分析し、人間活動の影響を照合することによって、「人間を含んだ水辺の生態系」の全体像の解明を目指している。

三ヵ年の計画で、年間4・5回の研究会を実施し、各自の研究成果の報告ならびにそれに基づいた分野間での討議を行っている。また毎年1回は外部への公開型の研究会を開催し、研究成果を学外にも広く公表している。

3. 今年度の活動状況

活動二年目に当たる本年は、より学際性を打ち出す意味から、昨年の研究題目「水辺エコトーンにおける伝統的生業活動とコモンスの変容に関する研究」を修正し、「生物多様性」の視点をタイトルに含めることとした。また、新たにプロジェクトメンバーに藤栄剛氏を迎え、村落の環境経済学的研究について増強した。

研究会等の活動記録(回数表記は昨年度からの通算)

- ・第5回研究会
7月24日(月)16:20~18:00 大津サテライト
鈴木俊一郎(元滋賀県土木交通部都市計画課)
「琵琶湖のヨシ群落の保全について」
- ・第6回研究会
11月12日(日)琵琶湖博物館10周年記念企画展シンポジウム「琵琶湖をめぐる景観の歴史」において、佐野静代が研究成果を発表(総合地球環境学研究所と共催)
- ・第7回研究会
11月21日(火)16:00~18:00 大津サテライト
今田美穂(ウォーターステーション琵琶)
「琵琶湖逆水灌漑域における水系意識の再編の可能性」
- ・第8回研究会
07年2月7日(水)17:20~19:00 大津サテライト
滋賀大学教育学部地理研究室(報告者:松田隆典)
「琵琶湖漁業の現状 尾上・沖島・菅浦を事例として」
- ・第9回研究会(滋賀大学研究フォーラム・環境総合研究センター第3回年次シンポジウムとして開催)
07年3月3日(土)13:00~17:00 コラボしが21
全体テーマ「水辺エコトーン 内湖・ヨシ地の生物多様性と文化の多様性を守る」
西野麻知子(琵琶湖・環境科学研究センター)
「内湖の生物多様性保全・修復に向けて」
コメント:服部昭尚
牧野厚史(琵琶湖博物館)
「ヨシ帯保全における自然と人間との適度な関係」
コメント:梅澤直樹 総合コメント:佐野静代

活動内容とその総括

異分野間での成果の照合により、水辺エコトーンにおける人間活動とその影響について、動態的な分析が進みつつある。本年度の研究活動のうち、第6回研究会では琵琶湖博物館・総合地球環境研究所との連携により、琵琶湖岸の水辺の景観史について幅広い討議を行った。また第9回の研究会は、センターの年次シンポジウムとして、本プロジェクトの成果を中心に据えた企画となった。県内・県外の研究機関、さらに行政関係者の参加を多数得ており、本プロジェクトは学外の研究機関や行政との連携・研究交流の場としても重要な役割を果たしている。